



小林 宗作

『窓ぎわのトットちゃん』と

白梅学園をめぐる教育史——

白梅学園高等学校教頭 上木 光夫

空前のベストセラーの背景

『窓ぎわのトットちゃん』と題する黒柳徹子の著書が講談社から出版されたのは一九八一年三月五日のことであった。当時、校内暴力事件が全国的に多発し、いじめや不登校も深刻化するなど、学校教育をめぐる深刻な問題が噴出していった。折しも著者はその「あとがき」を、「中学の卒業式に、先生に暴力をふるう子がいるといけない、ということ、警察官が学校に入る、というニュースのあった日」に記したという。このような時期に、著者は戦前・戦時下に通ったトモエ学園（小学校）を舞台とする教育の情景を、

校長の小林宗作や仲間たちとの交流を軸にファンタジーのように描いて見せたのだった。

初版の発行部数は二万部であったが、誰の予想をも越える驚異的な売れ行きを示し、増刷に次ぐ増刷を重ねることになった。僅か八カ月後には三百七十万部に達し、敗戦直後に出版された『日米会話手帖』を抜く「出版史上空前のベストセラー」として「構造不況の出版界で奇蹟に近い快挙」と評された。その後も世代や職業を越えて読み継がれ、次々と回し読みもされながら、今日ではついに七百万部を越えたといわれる。このような事実は、日本の教育の再生への人々の願いと希望が健在であることを物語っていた。

著者や出版社に寄せられた多数の読後感には、「トットちゃん」の目に映った夢とファンタジーに溢れる世界と小林宗作像に、教育の原風景を発見したことへの驚きと喜びが綴られていた。

ところで、小林宗作と白梅学園が深い関係を有すること、小林を通して白梅学園に継承されたものが大正期新教育運動の中心的な部分に繋がる良質な事業と精神であったことを知る人は必ずしも多くない。そこで小稿では、小林宗作に視点を当て、白梅学園に存する歴史的背景の奥行きと期待される役割の一端を照らし出すことにしたい。

小林宗作とトモエ学園をめぐる教育史 — 白梅学園に継承された事業と精神 —

一九三七年四月、小林宗作（一八九三—一九六三）は東京・目黒区自由ガ丘の地にトモエ学園小学校とトモエ幼稚園を創設したといわれるが、そこに重要な前史があったことを見落としてはならない。小林は、手塚岸衛（一八九〇—一九三六）の創設した自由ガ丘学園（小学校と幼稚園）が手塚の死去により経営不能に陥ったのを、私財を投じて引き継いだのであった（「トモエ」とは小林の長男「巴」氏の名に因んだものといわれる）。手塚は大正期の教育界で「自由教育の闘将」と称され、主事を務めた千葉師範附属小学校

を自由教育運動のメッカとした人物である。しかし大正デモクラシーの流れが退潮に向かう中で、陸軍配属将校の画策によって公立学校を開放される。公立においては断たれた自由教育の夢を私立において実現しようとして創設したのが自由ガ丘学園であった。また失意のうちに野に下った手塚が自由ガ丘学園を創設するまで、彼に暫しの足場を提供したのは野口援太郎を校長とする池袋兒童の村小学校であった。手塚は同校に「見習兼客分」として通いつつ、やがて創ろうとする学園の構想を練ったという。兒童の村は、徹底的な個性開発と兒童中心主義を標榜し、大正期新教育の頂点と評される私立新学校であった。その兒童の村も一九三六年に閉校した。兒童の村と自由ガ丘学園は歴史の表層からは姿を消した。しかしその精神は自由と個性を尊重するトモエの教育の底流に生き続けていたのである。

一九四五年四月の空襲でトモエ学園は焼失したが、戦後に幼稚園は復興し、一九六三年に小林が死去するまでその教育は続けられた。「窓ぎわのトットちゃん」によって小林は優れた小学校教師として語られることが多いが、ダルクローズ直伝のリトミックを中心とする彼の教育の足場はむしろ幼児教育に置かれていた。トモエ学園を創設するまで十二年間に渡り成城学園幼稚部主事を務め、トモエ学園創設後の一九三八年にも「幼な児の為のリズムと教育」と

題する論文を公刊した。戦後の小林は幼児教育実践に携わる一方で、厚生保母学園校長として自らの理想を引き継ぐ保育者養成に力を注ぐようになっていった。

白梅学園の前身の東京家庭学園は、戦時下の一九四二年に社会教育協会を母体として創設された。戦争末期の一九四四年には一時閉鎖を余儀なくされたが、一九四六年には本格的に始動する。教育目標には「生活の科学化・社会化・芸術化」が掲げられた。この「生活の科学化・社会化」を大きくカリキュラムにリトミックが導入され、第一人者の小林宗作が講師として招聘された。その後、小林を校長とする厚生保母学園とは単位の交換制が行われるなど親しい関係が形成され、東京家庭学園の研究生に保育者資格取得の道が開かれた。こうした経緯の中で一九五〇年に白梅幼稚園が創設された。その保育内容は小林の主宰するトモエ幼稚園にならい、リトミックを中心にしながらも子どもの自由な生活を保障し、個性を十分に伸展させようとするものであった。小林の厚生保母学園は生徒数の減少や経営困難等の事情により一九五三年三月をもって閉鎖の止む無きに至った。小林はその保育者養成事業の継承の交渉を、社会教育協会の理事長小松謙助と東京家庭学園の主事樋口愛子とに対して行った。樋口は心理学を専門としながらも音楽に造詣が深く、小林とはかねて親交があった。一九五

三年四月、東京家庭学園は厚生保母学園の事業を実質的に継承する形で白梅保母学園と名称変更し、発展的解消を遂げた。白梅保母学園発足時には、小林も保育理論やリズムの授業を担当し、教育活動が軌道に乗るのを支えた。その後、学校法人白梅学園、白梅学園短期大学、白梅学園高等学校などの設立が行われ、紆余曲折を経ながらも白梅学園は総合的な発展を遂げて今日に至っている。白梅学園の在り方として浸透している、人間一人ひとりを大切にすることをの源流は、既に連載されている「白梅学園の先駆者たち」の系譜にも見出せようが、小林宗作に即してそれを求めるならば、上記のような近代教育史の隠された深層に辿り着くのである。

小林宗作のプロフィール

小林宗作は一八九三(明治二十六年)年、群馬県の山村の農家に生まれた。幼い頃から音楽が好きで、榛名山の見える美しい川のほとりで指揮棒を振って遊んでいたという。子どもは自然の中で伸び伸びと育てるべきだとする小林の教育観は、自己の幼時体験に根差していた。代用教員の時代を経て、東京音楽学校(現東京芸術大学)の師範科に入学。卒業後、成蹊学園小学部の教師となる。成蹊学園創立者、中村春二の自由と個性を尊重する教育方針は、小林に

大きな影響を与えた。しかし自己の音楽教育の限界を自覚した小林は、三菱財閥の岩崎小弥太の援助を受け、一九二三年にヨーロッパに留学、ダルクローズからリトミックを学んだ。一九二五年に帰国し、小原国芳の誘いで成城学園幼稚部の創設に参加、主事としてリトミックを中心とする独創的な幼児教育を展開する。後に、小原は玉川学園を、小林はトモエを創設することになる。なお小林は三十歳代の半ば、金子家に養子入籍し、戸籍上は金子姓となったが、日常的には旧姓の小林を使用していた。一九三二年に「日本リトミック協会」を設立、戦後に至るも幼児教育・音楽教育の分野で活躍した。黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』によってその存在が全国に知られるようになったのは、死後十八年が経過してからのことであった。

小林宗作とトモエ学園の教育

—「トットちゃん」の視点を中心に—

『窓ぎわのトットちゃん』が国民的な共鳴を受けたのは、何よりもその内容の素晴らしさによるものであった。白梅学園と歴史的に深い繋がりを有する小林宗作とトモエの教育は、著者の瑞々しいセンスとリズムカルな語り口で、夢と優しさとファンタジーに満ちた世界として描き出された。

物語は著者がトモエ学園に転校する日の、小林校長との

出会いから始まる。「さあ、なんでも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」「話したいこと!」（なにか聞かれて、お返事するのかな?）と思っていたトットちゃんは、『なんでも話していい』と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序も、話しかたも、少しグチャグチャだったけど、一生懸命に話した。「小学校一年生のとりとめのない話を、小林校長はたっぷり四時間、「一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、…身を出して、一生懸命、聞いてくれた」。著者は「この校長先生といると、安心で、暖かくて、気持ちがよくかった。（この人となら、ずーっと一緒にいてもいい）」と思うようになった。

子どもたち一人ひとりを深く理解し、それぞれのかげがえのない個性を大切に育てたいとする小林の願いは、次のエピソードにも伺える。「校長先生は、トットちゃんを見かけると、いつも、いった。『君は、本当は、いい子なんだよ!』そのたびにトットちゃんは、ニッコリして、とびはねながら答えた。『そうです、私は、いい子です!』：トットちゃんの一生を決定したのかも知れないくらい、大切な、この言葉を、トットちゃんが、トモエにいる間じゅう、小林先生は、いい続けてくれたのだった。」

トモエ学園の生活は驚きと感動に満ちていた。「その日

の気分や都合で、毎日、好きなところに座っていい」席順、「国語であろうと、算数であろうと、自分の好きなものから始めていっこうに、かまわない」時間割……。ある日、学校に図書室として使う電車が運ばれてくることを知った子どもたちは、学校に泊まり込んで待っていた。電車が到着した時の情景は次のように描かれる。「子供たちは、パジャマ姿で、朝日の中にいた。そして、この現場に居合わせたことを、心から幸福に思った。そして、あんまり、うれいので、次々に、校長先生の肩や腕に、ぶらさがったりとびついたりした。校長先生は、よろけながら、うれしそうに笑った。校長先生の笑う顔を見ると、子供たちも、また、うれしくなって笑った。…そして、このとき笑ったことを、みんなは、いつまでも、忘れなかった。」

著者はトモエ学園で、自分を認めてくれる教師と出会い、大切な思い出をいくつも作った。その出会いと思い出は、今日に至るまで著者の生き方を根底において支えている。優れた教育は人の心の中に生き続け、一生を支え続ける、ということを示しているよう。

小林宗作が問いかけてくるもの

時代の変化に伴って、教育の在り方も変わってくる。しかし世の中が変わっても、教育の原点として変わり得ない

部分もあるはずである。小林宗作とトモエ学園をめぐる教育史は、子どもへの深い愛と信頼が本場の教育を成り立たせるといふことを教えてくれる。自分ばかりでなく他者の幸福をも願う心、厳しい現実に立ち向かって生きる力は、愛と信頼の関係を基盤とした教育の経験を通して培われるということを示している。著者はその後の生き方において示している。二十一世紀を迎え、新しい教育の在り方をめぐる議論が交錯する中で、一方ではこうした教育の原点への回帰への視点も失ってはならないだろう。白梅学園が継承した歴史的遺産の重要性を自覚しつつ、更なる発展が期待される。

【参考文献】

- 中野光『教育改革者の群像』国土社、一九七六年
黒柳徹子「窓ぎわのトットちゃん」講談社、一九八一年
塩澤実信・植田康夫編『トットちゃんベストセラ―物語』理想出版社、一九八二年
『白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌』、一九八二年
佐野和彦『トットちゃんの先生 小林宗作抄伝』話の特集、一九八五年
(※冒頭的小林宗作氏の写真は、ここから転載させていただきました。)